

なし 赤星病について



図1 初期病斑



図2 発病葉



図3 葉裏に形成された毛状体（銹子毛）



図4 カイズカイブキ上の冬胞子堆

1 生態

赤星病 (*Gymnosporangium asiaticum* Miyabe ex G. Yamada) は葉や葉柄、新梢、果実、果梗などナシの様々な部位に感染し発病するが、主な発病部位は葉である。

本病はナシとビャクシン類とで宿主交代を行う。ビャクシン類につくられた冬胞子堆は、春期の降雨により水分を得るとゼリー状に膨らみ小生子をつくる。これを膨潤という。この小生子が飛散し、ナシの展葉後の若い葉に感染する。葉には鮮やかな橙色の小斑点が生じる。その斑点はしだいに拡大し、直径数ミリの黄色の丸い病斑となる。病斑部はしだいに厚みを持ち、葉裏にはやがて毛状体（銹子毛）がつけられる。これより銹胞子が飛散し、ビャクシン類に感染する。ビャクシンに感染するとで2～3月に冬胞子堆をつくる。

このように本病はナシとビャクシン類と宿主交代を行うため、ナシ園周辺にビャクシン類が植栽されていると発生が多くなる。その距離はおよそ2 kmであり、近いほど影響が大きくなる。

2 発生状況

ビヤクシン上に形成された冬孢子堆は膨潤するが、少量の雨ではすべての冬孢子堆が水分を得られずに、小生子の飛散が長期化することがある。冬孢子の発芽および小生子の発生適温は約15℃である。乾燥条件に弱く湿度90%以下では発芽率は低下する。

4月下旬頃よりナシの葉に病斑が認められる。激発時には1枚の葉に複数の病斑がつくられ、早期落葉することもある。病斑は古くなると他の菌に侵され黒くなり、やがて穴があく。

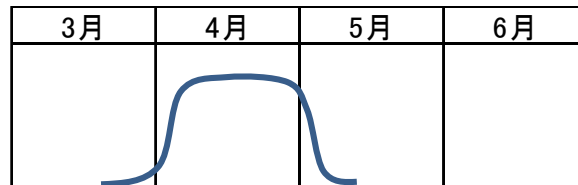


図5 赤星病菌（小生子）飛散消長

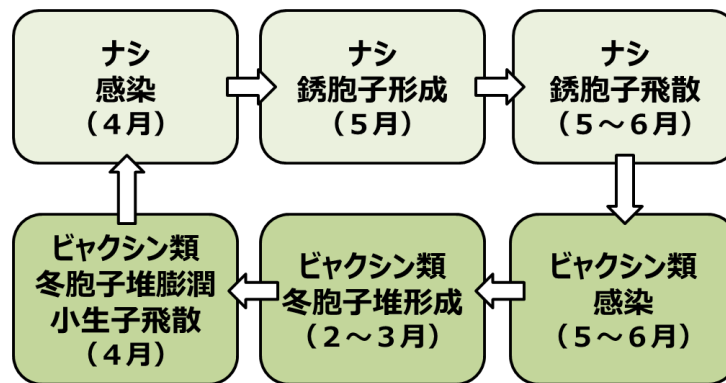


図6 赤星病の感染環

3 防除対策

(1) 伝染源の除去

ナシ園から2km内にビヤクシン類があると発生が多くなるため、これらをできるだけなくす。とくに、本病菌は風により飛散するため、風上にビヤクシン類があると発生が多くなる。

(2) 予防の徹底

ナシの展葉後、ビヤクシン上の冬孢子堆が膨潤をはじめたら、7~10日間隔で2~3回防除を行う。なお、散布に際しては薬液が葉に十分量付着するよう丁寧におこなう。